

8) 当院人間ドック発見癌

—発見経緯と予後について—

原 敬治・佐藤 敏輝 (厚生連中央総合
松月 由子 (病院放射線科))

当院人間ドックにて、昭和62年1月から平成4年12月末までの受診者数は20,893人で、発見癌97人、癌発見率0.46%であった。胃癌55人(57%)、大腸癌22人(23%)、肺癌5人(5%)、腎癌5人(5%)、子宮頸癌3人(3%)、甲状腺癌3人(3%)、食道癌2人(2%)、肝癌2人(2%)、膵、乳腺、白血病、転移性肺癌が各1人であった。

他機関との比較で、当院ドック癌発見率は断然すぐれているが、人間ドック癌発見効率は低いので、今後は糖尿病や心疾患(虚血、不整脈)の発見と適正な医療機関を指定して、本来の人間ドックの責任を果たしたい。

現在まで発見癌患者中、既に6名が死亡しているが、予後調査も継続して行い、反省材料として、今後のドック改善にしたいと考えている。

9) 原発性十二指腸癌の1例

酒井 達也・山際 訓 (厚生連佐渡総合)
岩田 文英・山田 八郎 (病院内科)

下行脚に原発した腺癌の1例の画像所見を提示して検討を加えた。61歳男性。腹部単純写で著明な胃拡張、十二指腸造影で下行脚に左右対称的な全周性狭窄が見られ、内視鏡では球後部粘膜は浮腫状に肥厚して内腔は強く狭窄していた。腹部超音波では下行脚に限局性の壁肥厚を認めたが接する膵胆管系に異常を認めず、血管造影では膵頭部動脈アーケードの十二指腸枝に限局性の淡染像を認めた。狭窄部からの生検で低分化型腺癌の所見を認め、以上の画像所見を総合して十二指腸癌と診断した。切除標本では、狭窄部中央に浅い陥凹性病変が見られ、粘膜下層から膵十二指腸間隙にかけて硬性に浸潤し腫瘤を形成する十二指腸癌の所見であった。

10) Von Recklinghausen 病に合併した胃・
十二指腸平滑筋腫の1例西村 竜子 (新潟県立小出病院)
放射線科

Von Recklinghausen 病の消化管随伴病変として神経線維腫が知られているが、平滑筋原性腫瘍の報告は少ない。Recklinghausen 病を follow するにあたって注

意する点は、消化管非上皮性腫瘍の場合、症状が出にくく、症状があっても外来の検査では原因がはっきりしないことが多いこと、また病変の悪性化がありうることの2点と考えられる。病理を含め画像診断で明らかな遠隔転移がない限り、悪性の診断が困難であることをふまえ、定期的な消化管検査が必要と考えられる。

11) 当院における膵損傷の8例

川崎 俊彦・前田 春男 (新潟市民病院)
黒川 茂樹・横山 道夫 (放射線科)

1979年からの当院疾患登録の検索により8例の膵損傷の症例を報告した。年齢は8才から45才、男性5例、女性3例で、近年明らかに増加しており、全例非開放性損傷で、交通事故によるものが5例であった。入院時5例に超音波が、全例にCTが施行され、画像検査では4例に膵損傷が疑われ、retrospectiveにはその他に2例に疑いえた。腹部合併損傷は4例(1例は疑い)に認め、3例に手術的治療がなされ、予後は7例で良好であった。膵損傷は画像診断を含め、初期診断は必ずしも容易ではない。その中で血清アミラーゼの診断的意義は高いが、偽陽性・偽陰性例もあり、腹部外傷の診断の際には常に膵損傷の可能性を考慮に入れて診断することが重要と思われた。また治療法の選択にはERPによる主膵管損傷の有無の確認が有用と思われた。

12) 予後が期待できる胆嚢癌の画像上の特徴

佐藤 敏輝・松月 由子 (厚生連中央総合)
原 敬治 (病院放射線科)

【目的】予後が期待できる胆嚢癌の画像上(US, CT)の特徴について検討した。

【対象と方法】1989年1月から1992年10月まで当科で画像診断をされた胆嚢癌50例を対象にした。このうち、生存例は6例あったが、2例はすでに癌の広範な進展がみられ、予後不良と考えられた。残りの4例は非胆癌生存例(術後14ヶ月~54ヶ月)であり、これらの画像上の特徴を抽出した。

【結果と考察】非胆癌生存の4例は次のような共通の画像上の特徴を有していた。

- ① 限局した境界明瞭な隆起を形成する。
- ② 周囲の胆嚢壁の肥厚がない。

一方、非胆癌生存例以外では上記①、②をとともに満足する症例はなかった。上記①、②は腫瘍の発育が限局性、